調査研究「『書くこと』を中心にした言語活動」
－中学校・高校国語科における学力向上のための授業改善－

実践編　基礎②　「２００字作文」

長崎県教育センター　高校教育研修課

１．２００字作文とは

「書くこと」を中心にした言語活動を進めていくためには、まとまりのある文章を書けるようにすることは大切である。そのための基礎トレーニングとして、２００字作文は有効である。

２００字程度の字数があれば、一つの話題について簡潔でまとまりのある段落になる。あとは、その段落をつなぎ、構成していくことで、２０００字の文章でも、５０００字の文章でも書くことができる。まずは、２００字程度で、まとまった文章が書けることを目標に設定することを提案したい。

２．実践例Ⅰ：「折々のうた」の視写と２００字作文

大岡信氏の「折々のうた」は、本文の字数が２００字前後で、一つのまとまった文章の典型と言えよう。「折々のうた」をモデルとして２００字作文の書き方を学ぶという実践例を紹介する。

ただ 人には馴れまじものぢや 馴れての後に
　　離るるるるるるるるが 大事ぢやるもの
　　閑吟集

歌謡の主題で最も一般的なものは男女の愛。神話伝承時代の歌謡から現代にいたるまで、この事情は変わらない。よくも飽きずに、と思うが、逆にいえば、この主題はそれだけ普遍的かつ多様なのである。室町歌謡の作者、特に遊女らは、「ただ人は情あれ」と歌いつつ、他方ではこんな歌も歌ったのである。「ぢやる」は、であるの転。惚れるは簡単、別れるは大ごと。この単純な真実が、大むかしも今も人を苦しめる。

本文の文字数は１９０字。７つのセンテンスで構成されている。１文の平均文字数は２７．１字である。一般的に、１文の文字数は３０字～４０字が読みやすい文章だと言われる。「折々のうた」は概して１文が短い。その点でも、簡潔な文章を書く際のモデルとして有効である。ちなみに、朝日新聞「天声人語」の１週間分を取り上げて、１文の平均文字数を調べたところ、31.2文字、29.9文字、27.2文字、34.7文字、26.0文字、33.2文字、33.2文字であった。

１学期間、授業の開始10分を利用して「折々のうた」の視写を行う。速く正確に書き写すことを目的として行う。要した時間を秒まで計測する。書き写した生徒は、コメントを簡潔に記す。取り上げられた詩歌についてのコメントでもよいし、大岡氏の文章についてのコメントでもよい。短時間で感想をま

とめる訓練にもなる。

２学期に、俳句や歌についての、生徒による「折々のうた」の作成を行う。次は実際に生徒が書いたものである。

君と食む三百円のあなごずし
　　そのおいしさを恋とこそ知れ
　　俵万智

『サラダ記念日』（昭六二）所収。現代的な歌風を特色とする、現在最も注目される女流歌人の一人。この歌では、内容的にこそ現代的であるが、「食む」や「こそ」など、古文的な言葉を使うことで、歌の深さを一層引き出している。日常の何気ない場面と恋心を見事に調和させ、すんなりと読みやすい歌に詠みあげる。読む人の心に、ちょっとした平和をもたらすような、彼女ならではの歌と言えるだろう。

本文の文字数は１８５字。５つのセンテンスで構成されている。１文の平均文字数は３７．０字である。大岡氏の文章の運び方をつかんで要領よくまとめている。文章の展開をまねるということは、思考の展開の仕方をまねるということである。

せっかく素晴らしいモデルがあるのであるから、使わない手はない。

３．２００字作文を活用して、「対話」のある授業を作る

梶井基次郎の「檸檬」を学習した後に書いた生徒の文章がある。

　　儚きものの美しさ

意味不明だと思っていた筆者の焦り。授業が終わり筆者が背負っていたものの重さを、少し理解できた気がする。崩れゆく彼の人生を、完璧な美しさを持った丸善が見下しているように思えたのかもしれない。自暴自棄のようにも見える彼の行為だが、そこには彼なりの意地があった。みすぼらしくても儚くても美しいものはある。すずしい味のするおはじきを握りしめ、彼は一生懸命つなぎとめようとしたのだろう。もろく儚い彼自身の心を。

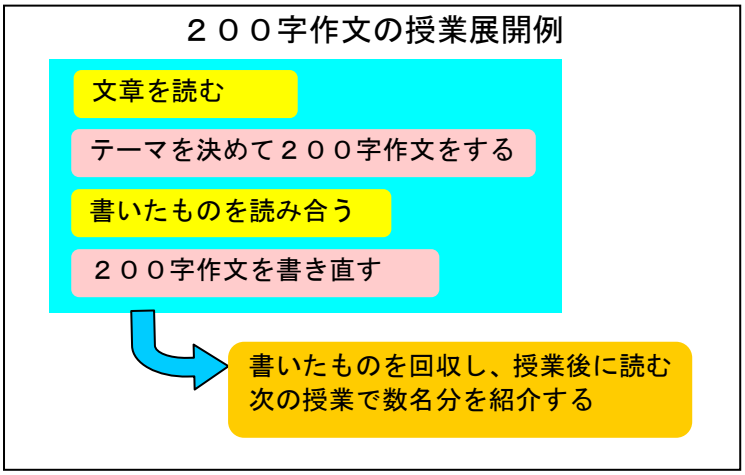
本文の文字数は２００字。７つのセンテンスから成る。１文の平均文字数は２８．６字。

小説の学習の目的は、教室の読みを一つの主題に収斂させることではない。一人一人の生徒による様々な読みが重なり合うことによって、教室の読みが深まりと広がりを持つ。

「檸檬」の解釈は様々である。様々な解釈に揺れながら、生徒は、上のような文章を書くことで、自分の読みを形づくっていくのであるし、また、それらの文章を教室の中で読み合うことで、自分の読みを広げていく。

２００字作文の利点は、書く方としてもあまり負担にならないこと、書いたものを読むのにも時間がかからないことである。書き慣れてくれば、１時間のうちに、２回書くことは可能である。例えば、次のような授業はできないか。

文章を読み、テーマを決めて２００字作文をする。書いたものを４～５人のグループで読み合い、意見を言い合う。そこでの意見を踏まえ、本文にもう一度立ち返り、二度目の２００字作文をする。



書かれたものがあれば、授業者は授業後に全員の文章に目を通し、それぞれの理解度を確認しながら、授業者自身の授業への評価を行うことができる。次時に前時の成果として、数名分をプリントにして配布し、全員で共有することもできる。個々にはコメントを添えてフィードバックすることも可能である。

佐藤学氏は、「学びは、世界づくり（認知的実践）と仲間づくり（対人的実践）と自分づくり（自己内的実践）の三つの対話的実践によって遂行されるのである。」（小学館『授業を変える　学校が変わる』）と述べている。各自の考えを文章化し、文章化したものをもとにして話し合う。２００字作文は、その活動を支えるものとして有効な学習活動である。

４．「２００字ちょうど作文」

トレーニングとして、「２００字ちょうど作文」についても紹介をしたい。２００字目のマスに句点がくるように、２００字きっかりの文章を書かせる。「２００字ちょうどの作文をしなさい。」と指示するだけで、生徒の書く意欲が高まる。同時に、語の選択にも気を配るようになる。句読点の打ち方にも最大限の配慮をするようになる。２００字作文の導入として有効である。